

井 上 淳
Jun INOUE

一、はじめに

江戸時代の遍路数については、これまで前田卓氏が四国の各靈場に残つている過去帳を調査し、その中から一二四五名（うち江戸時代は一一八五名）の遍路を抽出したデータが最も知られている¹。前田氏はそれをもとに、江戸時代を通じた遍路の年次別の変遷及び出身地について大まかな方向性を提示している。また、新城常三氏は、伊予小松藩の『会所日記』を取り上げ、寛保二（一七四二）年から文久二（一八六二）年にかけての小松藩領十六ヶ村から遍路に出た人数の変遷について検討を加えている²。

この二人の先駆的研究から江戸時代の遍路者数の変遷をまとめると、前田氏は、過去帳に初めて遍路が記載されるのが寛文年間からであり、宝永年間頃より毎年遍路が見出されるようになり、宝暦・明和年間には増加の一途をたどり、文化文政年間にになると瀬戸内海対岸から多くの遍路を集めて最盛期を迎えるとしている。一方、新城氏は、宝暦・明和年間から安永年間にかけて上向き、天明の飢饉で落ち込むが、寛政以降再び上昇に転じ、文化文政年間にピークとなり、それから天保の飢饉をはさみ、天保後半期から嘉永年間にかけて次のピークを迎えると記しており、前田氏の過去帳によるデータとかなり似た傾向を読み取ることができる。さらに、新城氏は『会所日記』の数字をもとに、遍路が本格化した江戸中期前後の年間遍路数の試算を行い、一万五千から二万前後という数字を導き出している。

A Quantitative Study of the Shikoku Pilgrimage Late in the Early Modern Period —An Analysis of "Entertainment of Pilgrims at Butsumokuji Temple"

This paper focuses on "Entertainment of Pilgrims at Butsumokuji Temple," a record of the hospitality shown at the 42nd temple of the Shikoku Pilgrimage. The entertainments were provided every year on July 25 by the Takatsuki family, merchants who received the patronage of the Yoshida fief. On this day pilgrims were served rice, miso soup, side dishes, pickled vegetables, sake, etc. In the "Entertainment of Pilgrims at Butsumokuji Temple," along with the information needed by the people preparing the meal, including the ingredients, utensils, expenses, and individual responsibilities, information about the people to be served, such as the number of pilgrims and their places of origin, also were recorded. Because twenty-six volumes of the record remain, covering the years from 1825 to 1854, quantitative data regarding the pilgrims during that period can be obtained that is as accurate as if a survey had been taken in the same place at the same time every year over a long period. From the data presented on this occasion, changes in the numbers of pilgrims and the distribution of their places of origin are clarified, and based on the mention of Buddhist priests, women, and people of the outcast class, observations are made about the rank and social status of pilgrims.

江戸時代の遍路数の変遷について両者がたどりついた結論は、前田氏のデータが各靈場の近くで亡くなつた遍路という限られた数を根拠にしてゐるなどの問題点を含むものの、現段階ではこれ以上の成果は期待できないとし

それでは、三引高月家が仏木寺において行つた接待の記録「於仏木寺接待」がどのような内容の資料なのか、その一例として以下に、天保五（一八三四）年分について翻刻文を掲載する。

て定着している³³。筆者もそのことに異論はないが、今後前田氏や新城氏とは異なる性格の資料を発掘するなどして、四国遍路の数量的な問題について、さらに相対化をはかる作業が後学には課せられているようと思う。本稿では、江戸時代後期の限られたデータではあるが、「於仏木寺接待」という新たな資料を用いることで、当該期の四国遍路の実像に少しでも迫りたい。

二、「於仏木寺接待」について

「於仏木寺接待」^{*4}は、吉田（宇和島市吉田町）の商人三引高月家（法華津屋）が、四二番札所の仏木寺（宇和島市三間町）で四国遍路の接待を行つた際の記録である。三引高月家は、祖を同じくする叶高月家とともに吉田藩の御用商人をつとめるとともに、代々丁頭・町年寄として吉田陣屋町の町政を担つた。吉田の魚棚一丁目に本店を構えたほか、宮野下（宇和島市三間町）、父野川（鬼北町）などに出店を設け、酒造・和紙・金融・塩浜など多角的な経営を展開した。特に、宮野下と父野川の出店を通じて周辺の村々から買い集めた和紙は、瀬戸内海運を利用して大坂に運ばれ、三引高月家に莫大な富をもたらした。

さて、今回取り上げるのは江戸時代後期の接待の記録であるが、当時の遍路への接待は村単位で行うもの、あるいは接待講で行うものが大半であつた⁵。三引高月家が接待を行つた仏木寺においても、境内に豊後佐伯接待講が建てた碑が残されており、接待講による接待も行われていたことが分かる。それらに比べて個人による接待は少ないが、三引高月家の地域における圧倒的な経済力があつたからこそ、毎年七月二五日に高月家単独の接待が行われていたものと思われる。

「天保五年甲午七月廿五日

於仏木寺接待

(豎帳)

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|----|-----|-----|-----|
| 一伊勢 | 一武藏 | 一三河 | 一京都 | 一大阪 | 一同 | 一廣島 | 一阿波 | 一泉州 | 一北灘 | 一大洲 | 一上川原瀬 | 一淡路 | 一同 | 一大阪 | 一勢州 | 一讃州 |
|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|----|-----|-----|-----|

：（中略）：

めん少し奥も出
右之通御座候、以上

合式百五人
外二九人仏木寺寺中
惣合式百拾四人

諸道具持參之品

一茶^(婆)
一茶碗
十五

一菓子手器

一かさし
三十人前

一布巾
三つ

一飯杓子
貳本

一鉢丁

一奈良茶碗
壹本

一奈良茶碗
十人前

一外ニ小遣錢式拾目程

前書之通惣勘定仕候所相違無御座候、以上

巳七月廿六日

忠七

鐵太郎

| | | | | | | | |
|------|-----|------|------|-----|-----|-----|-----|
| 惣差配 | 豊三郎 | 忠七 | 飯煎 | 千代松 | 平次 | 料理方 | 次三郎 |
| 下手伝 | 幸次郎 | 喜右衛門 | 喜右衛門 | 書役 | 鐵之助 | 金三郎 | 盛方 |
| お榮 | おさよ | お縫 | お縫 | 文作 | おしき | ゆせ | 林弥 |
| 当年赤飯 | 二相成 | | | | | | お桂 |

諸入用覧

一六拾三勺五分
一八勺四分七リ

一三勺三リ
一七勺五分

一武勺六分
一小豆六升

一醤油式升
豆腐拾丁

一ごま油代
露^(孝)千代

一みからし代
白瓜式つ

一五分
一壱勺八分

一五分
一壱分

一五分
一五分

一五分
一五分

一四勺
一五勺四分

一六勺
一六勺五分

一四勺
一五勺四分

一四勺
一五勺五分

一四勺
一五勺七分

外ニ茄子牛房ぼふぶら持參仕候へとも向山手作ニ而為相済申候、又そふ

「於仏木寺接待」は、毎年のように書役が交代したため、記載内容に若干の粗密があるが、書かれている項目についてはほぼ一定している。まず最初に接待した遍路の出身地、人数が記される。本稿ではそのことに着目して、次節以降で遍路の数量的な考察を試みる。

次に、接待を行う三引高月家側の人名、役割分担が賄人数として記される。賄人数は最小八人、最大十七人で、毎年十人前後が接待に当たってい、る。それぞれは、接待を監督する惣差配人をはじめ、ご飯を炊く飯煎、料理をつくる料理方、それを手伝う下手伝、接待の記録を記す書役、できた料理を盛り付ける盛方、終わった食器を洗う椀洗方などの担当が決められて

た。荷物は前日に馬で運び、賄入数の半分程度は前日に入つて、当日の早くから料理の準備を行い、残りの半分は当日の朝に出発して接待に当たつた。賄入数には、三引高月家の法華津屋以外の屋号の人物も含まれていることから、三引高月家の本店を中心にして、出店や分家なども巻き込みながら接待が行われたものと想像される。人数が足りない場合は、賃金を払い日傭を雇つて接待を行つてゐる年も見られる。

その次に記されている賄入用は、接待にかかった経費を書き上げたものである。接待の際に出す料理の食材や煮炊きを行うための薪代などで、毎年五六匁、一二六匁余りの経費が記されている。経費のかなりの部分を米代が占めており、その変動は米相場とほぼ対応している。今回事例にあげた天保五年には、遍路に赤飯が振る舞われているが、赤飯が出されているのはこの年だけである。賄入用に登場する食材からすると、通常は白米のご飯、里芋などが入つた味噌汁、油揚げやこんにゃくなどの酒の肴、香物、酒が遍路に供されていたことになる。

諸道具には、包丁などの調理具や接待に使う食器などが記されている。そして、最後に二人の名前が記されているが、これが本資料の差出人に当たる。天保五年の資料には宛先がないが、別の年の資料には「本家勘定場」と記されている。したがつて、「於仏木寺接待」は、接待を監督した惣支配人がその結果を三引高月家に対して報告した記録と考えることができる。

三、年次別遍路数について

二では、「於仏木寺接待」の資料の概要について紹介したが、三引高月家

文書には、この「於仏木寺接待」が文政八（一八二五）年から嘉永七（一八五四）年にかけて二六冊分が残されている。そこで、接待を受けた四国遍路の数に着目して、その年次的変遷についてまとめると、グラフ1のようになる。最も少ない年は弘化三（一八四六）年の四六人、多いのは天保三（一八

三二）年の三六五名まで、年ごとに人数のばらつきが見られるが、一年の平均人数を出すと約百六十人で、大まかには一〇〇～一〇〇名程度の年が大部分を占めると見える。

といえる。

注目されるのは、天保三年をピークに天保一〇年ぐらいまでは、ほぼコンスタントに二〇〇名を超える遍路に接待を行つてゐることである。このうち天保四年から七年は天保の飢饉に当たる年で、広くるとその前後天保二年から天保一〇年ぐらいまで不作は続いており、ちょうど天保の飢饉の時期に遍路の人数が多くなる傾向がつかめる。前田卓氏は、過去帳のデータをもとに西国巡礼に比べて飢饉の年ほど遍路の人数が増えることを指摘し、その理由について、西国巡礼が観光をかねてのいわば大名旅行といった人々が多いのに対し、四国遍路は下僧農民や女性を含めた人々で、これらは止むにやまれぬ信仰心から遍路に出た者と、生活をかけたいわゆる口減らしを目的とした乞食遍路が多かつたからとしている⁶が、飢饉時に遍路が増えるという傾向は確かに「於仏木寺接待」のデータからも読み取れる。

また、「於仏木寺接待」のデータでは、一日一〇〇人～二〇〇人程度の遍路が仏木寺を参拝していたことが分かるが、それは他のデータと突き合わせて、ある程度符合しているように思える。例えば、よく取り上げられる土佐藩の記録『山内家史料』の宝暦十四（一七六四）年の項には次のように記されている⁷。

他國辺路二月より七月まで一日に二、三百人も通り申し候、一宿一人前に五錢、八錢ほど宿賃おき候、もし川留等にて滞留仕り候へば、飯米・野菜等亦増二買ひ申候

土佐藩の一日二〇〇～三〇〇人は、仏木寺のデータの一〇〇～二〇〇人よりも少し多くあるが、近い数字が示されている。また、近年発見された明治大学刑事博物館所蔵の「寛政十三改革元酉春西郷浦山分廻見日記」は遍

路の年間総数を記した唯一の資料であるが、下横目である三八により遍路の人数について次のような報告がされている。^{*}

遍路通行当時一日二武百人位、去年分縮高式万千八百五拾壱人、内千七百九人逆遍路

但盛ニ通行仕候日者一日二三百人及申候事

ここにも遍路の数が一日に二〇〇人位で、多い日には三〇〇人までいくことがあるとして、寛政一二（一八〇〇）年の遍路の総数を二一八五一人、そのうち逆遍路が一七〇九人としている。総数二一八五一人から一日平均の遍路数を出すと、六〇人ぐらいになるので、二〇〇人～三〇〇人は、農閑期の遍路の数が増えるシーザンの数字と思われる。「於仏木寺接待」のデータは、七月という農閑期とはいえない月ではあるが、一〇〇～二〇〇が通常で、なかには三〇〇人を超える年も見られ、寛政二年の数字に近いものと考へて差し支えない。「於仏木寺接待」のデータは、寛政二年の遍路総数が年間二万人程度という数字の信憑性に裏付けを与えていた。

四、出身地別遍路数について

次に、遍路の出身地について表1に示した。全体のデータ数が四一四〇人、その中で圧倒的に多いのが地元の伊予の一四三八人で、全体の三四パーセントを占めている。二番以降には土佐、讃岐、阿波と続き、最寄りの四国地方が上位の四位までを独占している。四国地方に続き五位から一三位までは、五位安芸、九位備前、一位備中、一二位備後、一三位周防の山陽地方と、六位紀伊、七位摂津、八位山城の近畿地方の国の名前が並んでおり、この二つの地方から多く遍路が来ていることが分かる。さらに、以後一四位肥前、一五位筑前、一七位豊前などの九州地方と、一六位尾張、一七位美濃の

東海地方が続く。

ところで、このデータを見て気になることは、地元とはいえ伊予の人数があまりにも多いということである。伊予についてさらに詳しく見ると、地名の書き方に特徴があることに気づく。吉田藩や宇和島藩領の地名については、ほとんどが村名で記載されるのに対し、それ以外の藩の地名は多くが城下町名や郡名などで記載されている。そこで、伊予のなかで上位を占める地名を整理して表2に示してみた。七名以上の遍路が出ている出身地に限定したが、当然のことながらほぼ藩名と同義に使われている城下町名で記載されている事例が多く、一位の松山一七名、二位の西条六七名、四位の宇和島四七名、六位の大洲四〇名、一一位の今治の三四名となっている。しかし、それ以上に吉田藩領と宇和島藩領が入り組んでいる三間、広見、松野の鬼北地域から多くの人々が仏木寺を訪れていることが分かる。鬼北地域の多くは、高月家が楮栽培農家や紙漉きを行つてゐる農民に前貸しとして楮元銀を貸し与え、その代償として楮や和紙の集荷をはかつた地域であり、高月家の経済活動の基盤となつた地域といえる。また、寛政五（一七九三）年に三引高月家も深く関わる吉田藩の紙専売制をめぐり武左衛門一揆が起つた際には、一揆の参加者を多く出した地域でもある。「於仏木寺接待」により三引高月家の仏木寺での接待が確認できるのは、一揆からしばらく過ぎた時期に当たり、接待が不特定多数の遍路を対象としながらも、もう一方で高月家と経済的に深く結ばれている地域への社会的還元の意味合いが強かつたことを指摘できる。つまり、高月家では経済的につながりがある地域に毎年七月二十五日に仏木寺で接待を行うことを宣伝し、その結果としてこれらの地域から多くの人が仏木寺に集まるようになつたとも考えられる。

鬼北地域の人々の参詣のあり方を示してゐる史料としては、天保三（一八三三）年の「於仏木寺接待」があげられる。この年の帳面には、遍路の出身地の脇に「七ヶ所」や「三ヶ所」と記された遍路を見出すことができる。この記述は恐らく日帰り、または一泊程度で三～七ヶ所の札所詣りをする遍

路、つまりは小回り遍路のことを指しているものと思われる。七ヶ所詣りが六人、三ヶ所詣りが二〇人で、これら小回り遍路の出身地は、やはり三引高月家と経済的な関係が深い鬼北地域となつてゐる。「於仏木寺接待」は必ずしも統一基準があつて記されているわけではなく、小廻り遍路であつてもその旨を記載しなかつた年も多いと思われる所以、天保三年以外にも鬼北地域から仏木寺の接待に合わせて小回り遍路に出た人数はそれなりにあつたことが想定される。富裕な家が地域への社会的還元として接待を行つてゐたということ、また接待の日が地域の年中行事となつており、この日に合わせて近隣の地域から仏木寺を含む三ヶ所か七ヶ所を小回り遍路するような参詣行動があつたということ、これらのことこそ今回この「於仏木寺接待」を分析するなかで新たに浮かび上がつてきた視点といえる。

そして、これら近隣からの小廻り遍路を除いた数が、伊予の純然たる四国遍路の数になるが、差し当たり吉田藩以外の伊予の遍路を合計すると、三三九名になる。そして、三万石の吉田藩全体のうち三〇人ぐらいが小回りではなく、実際に四国遍路をしていると仮定すると、ほぼ三七〇名という数字が出てくる。そこで、伊予の数値を三七〇人に補正した上で、全国的に見てどの地域から遍路が多く出でているのか、さらに検討を加えていく。

日本全体の地域区分にしたがつて円グラフをつくつたものが、グラフ2-1になる。四国地方が三五パーセントと最も多く、近畿地方二一パーセント、中国地方一九パーセントが続き、中部地方、九州地方がそれぞれ九パーセント程度で、関東東北と距離が離れるにしたがつて人数が急激に減っていく。一方、前田卓氏の過去帳を使つたデータでも同じように地域区別に円グラフをつくつてみたのがグラフ2-2になる。仏木寺のデータに比べると、四国地方の遍路数が減少し、近畿・中国地方の遍路数が増大するが、全体的には仏木寺のデータに似た傾向の数字といえる。

遍路の出身地についてもう一つ注目されるデータとしては、喜代吉榮徳氏が、四国四県の六ヶ所の遍路札二万九千枚余りを整理したものがあげられ

る⁹。そこでは、四国地方が四四・八パーセント、近畿地方が二二・一パーセント、中国地方が一九・九パーセント、九州が六・三パーセント、中部地方四・八パーセント、関東地方一・一パーセント、東北地方〇・六パーセントとなつてゐる。四国地方が圧倒的に多いものの、仏木寺のデータとほぼ同じような順位と割合を示してゐる。前田氏のデータは、死亡した遍路のデータなので、既に喜代吉氏が指摘しているように、遠くからの遍路ほどその可能性が高まり、近い遍路ほど病氣をしても村送りで故郷に帰られる確率が高かつたことが考慮されなければならない。したがつて、「於仏木寺接待」から導き出される遍路の出身地の傾向は、江戸時代後期の実態をかなり正確に現してゐるものと考える。

五、一人歩きの遍路、さまざまな遍路

「於仏木寺接待」は、遍路が一グループどれくらいの人数で旅をしていたのかについてもデータを提示することができる。それがグラフ3であるが、一人で歩いている遍路が圧倒的に多く、逆に十人を超える団体で歩いている遍路は極めて少ないと、結果が一目瞭然となる。現在、四国遍路以外の寺社参詣が、江戸時代後期どの程度団体で旅行していたのかを明らかにする材料はない。しかし、伊勢講をはじめ、浅間講・富士講・御嶽講など多くの寺社参詣が講の組織をもつており、団体旅行することが前提とされるのに対して、遍路のほとんどが一人歩きということは、四国遍路が他の寺社参詣よりもはるかにパーソナルな信仰に根ざしてゐたことを指摘できる。

さらに、「於仏木寺接待」には、遍路の階層や身分についても記載がある。最も多いのが宗教者に関わる記述で、整理すると出家・僧九五名、日本廻国一六名、六部六名、山伏四名などが見られる。これらは中世の遍路の修行的な性格が近世になつても一部残存してゐる証しといえる。それ以外には、赤札四名、二一度六名などの記述もある。赤札は現在では八〇二四回遍

路を行つた者が使う納め札をいうが、喜代吉氏が紹介している明治中期の史料には七度以上二十度まで遍路を行つたものが赤札と記されている。¹⁰ その史料では二一度からは白札を使うようになるとあるので、二一度とは白札の遍路と考えられる。赤札、白札などの觀念が江戸時代後期には既にあり、これら多數度廻る遍路の存在が確認できる。女性と記されている遍路も二八名記されているが、「於仏木寺接待」は統一した基準で記されていたわけではないため、実際の女性遍路の数はさらに多かつたものと思われる。

最後に重要な問題として、「於仏木寺接待」には穢多と記されている遍路が存在していることを取り上げる。穢多とのみ記載されている者が九二名、また仏木寺付近の村名とともに穢多と記されている者が二一名、合わせて一三名の穢多が記録されている。三引高月家の接待が地元地域への富の社会的還元としての性格をもつていたことを先に述べたが、そうした一環として地域内の穢多を仏木寺で接待していたとも理解できる。そのことに関連して、嘉永三（一八五〇）年の「於仏木寺接待」の末尾に次のようなことが記されている。

穢多ダイハ老人、是者御寺江役ニ付明年 白米壱升ツノニ而遣ス定、
御寺并ニ恵喜蔵 断遣候ニ付定置候也、咎穢多江少ツムニ而も遣ス事
不可致事、是も恵喜蔵承知之事
 戊七月廿五日

冒頭に「ダイハ」という用語が登場するが、この用語をめぐっては、次のような史料もある*。

一非人跡之者村端ニ打かけ小屋或者岩穴等ニ致逗留候義、右跡之者追立候儀ハ役前ニ候条、以來尚又居村之穢多共心掛、無油断可追立事
但、穢多無之村方ハだいは取之穢多ともより追立申事

11

この史料は寛政一一（一七九九）年に近隣の大洲藩が出した布達であるが、「非人跡之者」が村はずれに小屋掛けしたり、岩穴に逗留するようになつた際には、居村の穢多が追い払うように命じている。その但書に、穢多がいない場合には、「だいは取之穢多」が追い払うようにと記されている。

現在、この「ダイハ」という用語の正確な意味をつかむことはできないが、穢多には普通の穢多と「だいは取之穢多」とがあり、この「だいは取之穢多」は、普通の穢多よりも広いテリトリーをもつていたとも解することもできる。推測も含めて少し踏み込んでみると、「ダイハ」とは村を超えて設定されている斃牛馬の処理権のことを指し、居村の中に穢多がない場合には、その処理権をもつ穢多が追い立てるように記しているとも考えられる。

もしその理解が正しければ、先の文書では、明年から「だいは取之穢多」には穢多へは白米を一升ずつ与えるが、それ以外の穢多には与えてはならないことを取り決めたということになる。そして、取り決めをしているということは、実際にはそれ以外の穢多、時には他の地域の穢多にまで白米を接待する状況があつたことを意味しないだろうか。そのような視点で、「於仏木寺接待」を見てみると、穢多記載のなかには「申廻」（猿廻し）と記されているのも一例あり、地元だけではなく、接待の対象に漂泊する芸能民などが含まれることがあつたことも指摘できる。

また、大洲藩では、遍路跡の旅人の取り締まりを穢多に再三命じているが*、そのことは四国遍路の中に穢多・非人にも似た存在が多く含まれることが前提となっていたのかもしれない。いずれにしても、「於仏木寺接待」における穢多記載には依然不明な点が多く、検討すべき課題が多く残されている。

六、おわりに

本稿では、吉田藩の御用商人三引高月家が四二番札所仏木寺で行つた接待の記録を用いて、近世後期の四国遍路について数量的な考察を試みた。今回

「於仏木寺接待」から抽出したデータは、毎年同じ日に同じ場所であったかも

サンプル調査したかのように、当該期の遍路についての数量データが得られることのが特徴である。前田氏の過去帳によるデータが一三四五名に対し、

今回のデータは四一六六名、出身地が記されていたものに限定しても、四一

四〇名とサンプル数でも前田氏の三倍以上となり、文政～嘉永期の江戸時代

後期に限定したものではあるが、年次別遍路数や出身地別遍路数について、かなり精度の高いデータを提供することができた。

また、「於仏木寺接待」には遍路の階層や身分に關わる記載もあつたが、極めて断片的なものであつたため、その部分については若干の指摘に止まつた。本資料から垣間見える遍路像を、さらに幅広い資料と突き合わせながら検討することが今後の課題となる。

【付記】

- *7 新城常三註2前掲書一〇二八頁。
*8 佐藤久光註3前掲書一二二頁。
*9 喜代吉榮徳『へんろ人列伝 行基菩薩より中司茂兵衛まで』（海王舎・一九九九年）。
*10 喜代吉榮徳註9前掲書。
- *11 高市光男編『愛媛部落史研究 近世～明治初年』（近代史文庫大阪研究会・一九七六年）、一五一～一五一頁。
- *12 註11前掲書一五四頁。

本稿は、「四国遍路と世界の巡礼」研究集会で報告した「記録からたどる四国遍路」の後半部分をまとめたものある。なお、前半部分については、「道中日記による四国遍路」「四国西國順拝記」を中心にして（『愛媛県歴史文化博物館紀要』第一一号、一〇〇六年）、「記録からたどる四国遍路」（『文化愛媛』五七、一〇〇六年）に記しているので、併せてご参照いただきたい。

*1 前田卓『巡礼の社会学』（ミネルヴァ書房・一九七一年）。

*2 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』（壇書房・一九八二年）。

*3 佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』（人文書院・一〇〇四年）、井馬学「徳島藩の遍路対策と村落の対応」（『四国遍路の研究Ⅱ』鳴門教育大学「四国遍路八十八カ所の総合的研究」・一〇〇五年）など。

*4 高月家文書（個人蔵・愛媛県歴史文化博物館保管）
井原恒久「江戸時代後期における四国遍路の接待」（『伊予史談』三四六・三四七号、一〇〇七年）

*5 前田卓註1前掲書一二二頁。

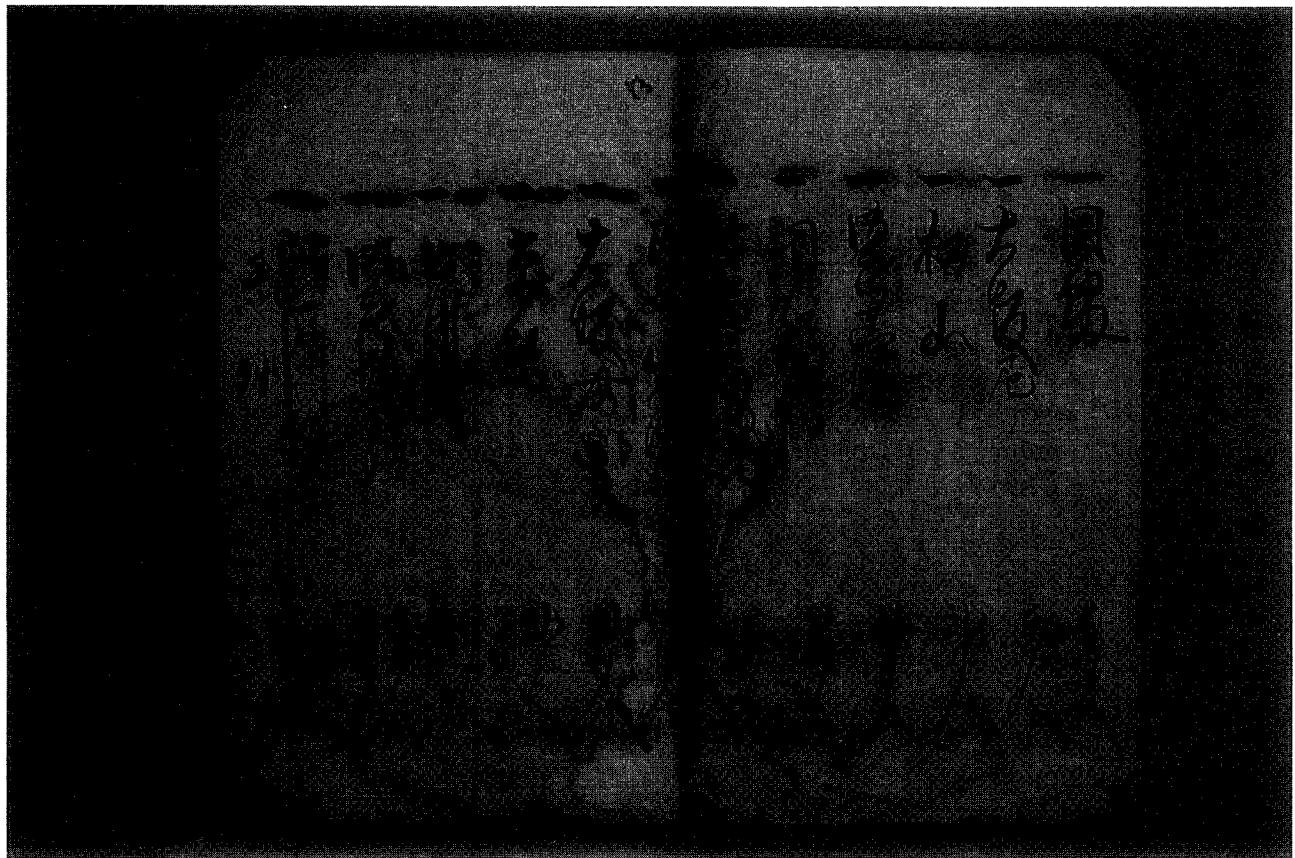


写真 「於仏木寺接待控」（天保 9 年）

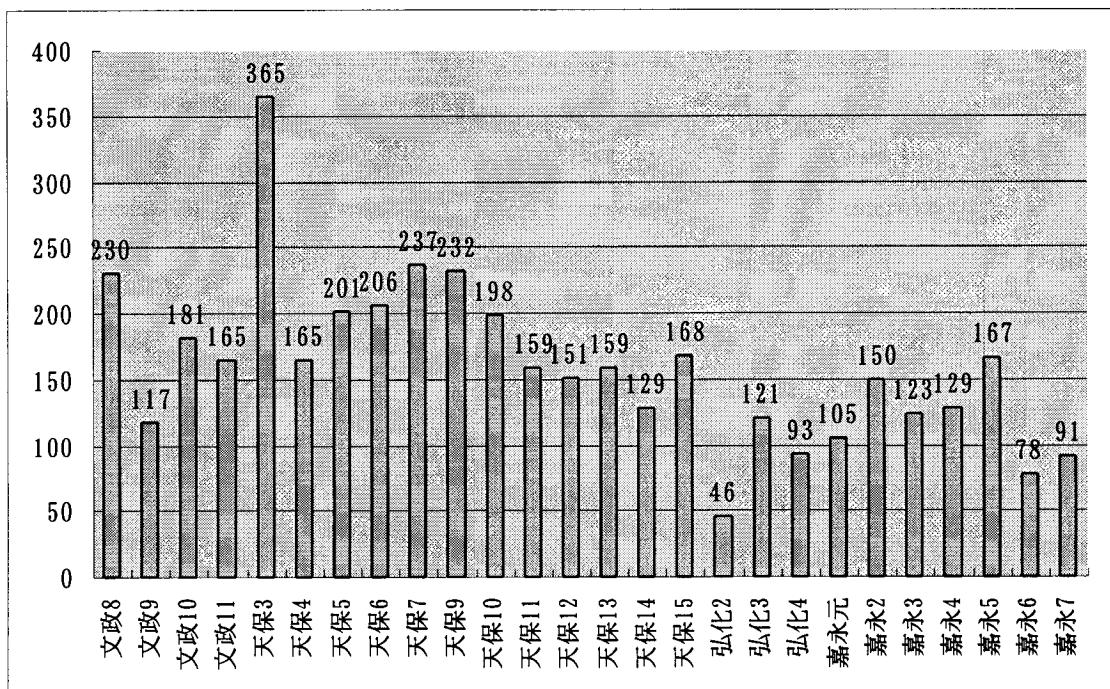
表 1 「於仏木寺接待」における出身地別遍路人数

| 順位 | 国名 | 仏木寺 | 過去帳 | 順位 | 順位 | 国名 | 仏木寺 | 過去帳 | 順位 | 順位 | 国名 | 仏木寺 | 過去帳 | 順位 |
|----|----|------|-----|----|----|----|-----|-----|----|-----|------|------|-----|----|
| 1 | 伊予 | 1438 | 45 | 7 | 26 | 美作 | 29 | 14 | 20 | 51 | 伊賀 | 6 | 5 | 40 |
| 2 | 土佐 | 272 | 6 | 39 | 27 | 信濃 | 28 | 9 | 27 | 52 | 薩摩 | 5 | 0 | 57 |
| 3 | 讃岐 | 264 | 79 | 3 | 28 | 肥後 | 27 | 18 | 16 | 52 | 能登 | 5 | 4 | 44 |
| 4 | 阿波 | 182 | 125 | 1 | 29 | 伊勢 | 24 | 7 | 33 | 52 | 常陸 | 5 | 4 | 43 |
| 5 | 安芸 | 142 | 45 | 7 | 29 | 日向 | 24 | 4 | 43 | 55 | 相模 | 4 | 2 | 53 |
| 6 | 紀伊 | 135 | 84 | 2 | 29 | 武藏 | 24 | 25 | 12 | 55 | 下野 | 4 | 3 | 49 |
| 7 | 摂津 | 129 | 67 | 5 | 32 | 淡路 | 23 | 16 | 18 | 55 | 若狭 | 4 | 3 | 49 |
| 8 | 山城 | 92 | 35 | 10 | 32 | 因幡 | 23 | 11 | 25 | 58 | 上総 | 3 | 0 | 57 |
| 9 | 備前 | 76 | 24 | 13 | 32 | 丹後 | 23 | 8 | 28 | 58 | 志摩 | 3 | 0 | 57 |
| 10 | 播磨 | 74 | 49 | 6 | 35 | 但馬 | 22 | 13 | 21 | 60 | 駿河 | 2 | 0 | 57 |
| 11 | 備中 | 72 | 73 | 4 | 36 | 奥羽 | 21 | 8 | 38 | 61 | 佐渡 | 1 | 0 | 57 |
| 12 | 備後 | 70 | 45 | 7 | 37 | 出雲 | 18 | 4 | 43 | 61 | 対馬 | 1 | 0 | 57 |
| 13 | 周防 | 69 | 26 | 11 | 37 | 越前 | 18 | 5 | 40 | 61 | 飛騨 | 1 | 0 | 57 |
| 14 | 肥前 | 58 | 12 | 23 | 39 | 和泉 | 16 | 16 | 18 | 62 | 伊豆 | 0 | 1 | 55 |
| 15 | 筑前 | 57 | 7 | 33 | 39 | 石見 | 16 | 7 | 33 | 62 | 安房 | 0 | 0 | 57 |
| 16 | 尾張 | 55 | 12 | 23 | 39 | 近江 | 16 | 8 | 28 | 62 | 大隅 | 0 | 0 | 57 |
| 17 | 豊前 | 44 | 8 | 28 | 42 | 筑後 | 15 | 3 | 49 | - | 丹州 | 6 | | |
| 17 | 美濃 | 44 | 7 | 33 | 43 | 伯耆 | 13 | 8 | 28 | - | 関東 | 3 | | |
| 19 | 大和 | 42 | 13 | 31 | 44 | 壱岐 | 9 | 0 | 57 | - | 備州 | 1 | | |
| 20 | 長門 | 40 | 17 | 17 | 44 | 越中 | 9 | 3 | 49 | - | 九州 | 1 | | |
| 21 | 豊後 | 34 | 21 | 14 | 44 | 甲斐 | 9 | 10 | 26 | - | 穢多 | 92 | | |
| 22 | 越後 | 32 | 1 | 55 | 44 | 三河 | 9 | 5 | 40 | - | 不明 | 44 | | |
| 23 | 加賀 | 30 | 4 | 43 | 48 | 下総 | 8 | 4 | 43 | 合計 | 4140 | 1071 | | |
| 23 | 河内 | 30 | 7 | 33 | 49 | 上野 | 7 | 8 | 28 | (人) | (人) | | | |
| 23 | 丹波 | 30 | 21 | 14 | 49 | 遠江 | 7 | 2 | 53 | | | | | |

(人) (人)

※左の順位の欄は、「於仏木寺接待」の人数順位、右の欄の順位は過去帳の人数順位（前田卓氏データ）

| 年代 | 人数 |
|------|------|
| 文政8 | 230 |
| 文政9 | 117 |
| 文政10 | 181 |
| 文政11 | 165 |
| 天保3 | 365 |
| 天保4 | 165 |
| 天保5 | 201 |
| 天保6 | 206 |
| 天保7 | 237 |
| 天保9 | 232 |
| 天保10 | 198 |
| 天保11 | 159 |
| 天保12 | 151 |
| 天保13 | 159 |
| 天保14 | 129 |
| 天保15 | 168 |
| 弘化2 | 46 |
| 弘化3 | 121 |
| 弘化4 | 93 |
| 嘉永元 | 105 |
| 嘉永2 | 150 |
| 嘉永3 | 123 |
| 嘉永4 | 129 |
| 嘉永5 | 167 |
| 嘉永6 | 78 |
| 嘉永7 | 91 |
| 合計 | 4166 |



グラフ1 「於仏木寺接待」の年次別遍路数

表2 「於仏木寺接待」の伊予における地名別遍路数

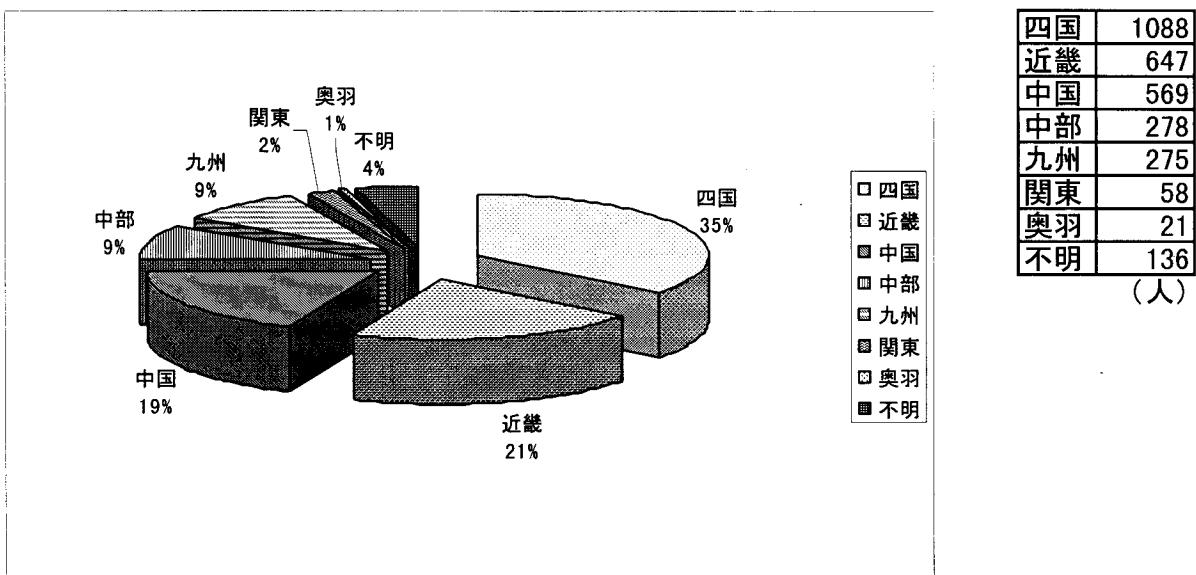
| 順位 | 地名 | 藩名 | 現行市町村 | 人数 |
|----|-----|------|---------|-----|
| 1 | 松山 | 松山藩 | 松山市 | 117 |
| 2 | 西条 | 西条藩 | 西条市 | 67 |
| 3 | 出目 | 吉田藩 | 鬼北町 | 64 |
| 4 | 宇和島 | 宇和島藩 | 宇和島市 | 47 |
| 5 | 御庄 | 宇和島藩 | 愛南町御荘 | 45 |
| 6 | 大洲 | 大洲藩 | 大洲市 | 40 |
| 7 | 清延 | 吉田藩 | 鬼北町 | 39 |
| 8 | 音地 | 吉田藩 | 宇和島市三間町 | 37 |
| 9 | 則 | 吉田藩 | 宇和島市三間町 | 36 |
| 10 | 大藤 | 吉田藩 | 宇和島市三間町 | 35 |
| 11 | 今治 | 今治藩 | 今治市 | 34 |
| 12 | 畔屋 | 宇和島藩 | 鬼北町 | 30 |
| 13 | 大内 | 吉田藩 | 宇和島市三間町 | 27 |
| 13 | 黒川 | 吉田藩 | 宇和島市三間町 | 27 |
| 15 | 延野々 | 宇和島藩 | 松野町 | 26 |
| 15 | 国遠 | 吉田藩 | 鬼北町 | 26 |
| 17 | 立間 | 吉田藩 | 宇和島市吉田町 | 25 |
| 18 | 西野々 | 宇和島藩 | 鬼北町 | 21 |
| 19 | 小松 | 吉田藩 | 鬼北町 | 20 |
| 19 | 松森 | 宇和島藩 | 鬼北町 | 20 |
| 21 | 宮野下 | 吉田藩 | 宇和島市三間町 | 19 |
| 22 | 中村 | 大洲藩 | 大洲市 | 18 |

(人)

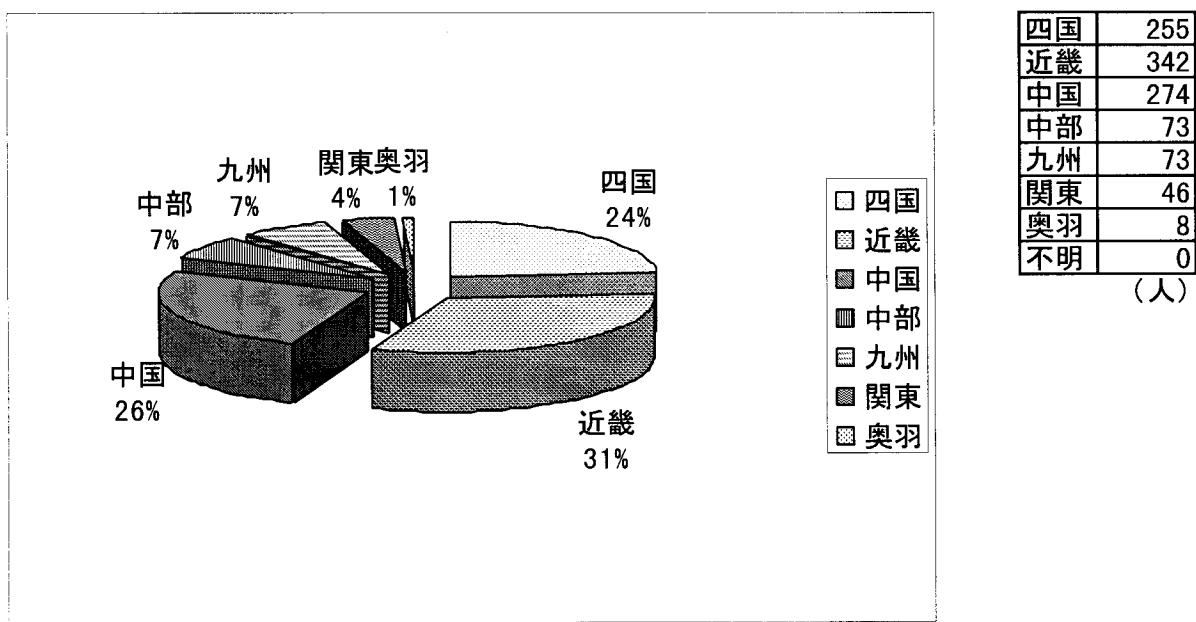
※7人以上の地名を記した。

| 順位 | 地名 | 藩名 | 現行市町村 | 人数 |
|----|-----|------|---------|----|
| 23 | 沢松 | 吉田藩 | 鬼北町 | 17 |
| 23 | 永野市 | 宇和島藩 | 鬼北町 | 17 |
| 25 | 成藤 | 吉田藩 | 鬼北町 | 16 |
| 25 | 豊岡 | 宇和島藩 | 松野町 | 16 |
| 27 | 奈良 | 宇和島藩 | 鬼北町 | 15 |
| 28 | 小倉 | 吉田藩 | 鬼北町 | 14 |
| 28 | 近永 | 宇和島藩 | 鬼北町 | 14 |
| 28 | 吉田 | 吉田藩 | 宇和島市吉田町 | 14 |
| 31 | 興野々 | 吉田藩 | 鬼北町 | 12 |
| 32 | 是房 | 吉田藩 | 宇和島市三間町 | 11 |
| 32 | 中間 | 吉田藩 | 宇和島市三間町 | 11 |
| 34 | 高串 | 宇和島藩 | 宇和島市 | 9 |
| 34 | 迫目 | 吉田藩 | 宇和島市三間町 | 9 |
| 34 | 深田 | 吉田藩 | 鬼北町 | 9 |
| 34 | 目黒 | 吉田藩 | 松野町 | 9 |
| 38 | 奥浦 | 宇和島藩 | 宇和島市吉田町 | 8 |
| 38 | 延川 | 吉田藩 | 鬼北町 | 8 |
| 38 | 清水 | 宇和島藩 | 鬼北町 | 8 |
| 38 | 松丸 | 宇和島藩 | 松野町 | 8 |
| 38 | 吉野 | 吉田藩 | 松野町 | 8 |
| 43 | 下大野 | 宇和島藩 | 鬼北町 | 7 |
| 43 | 喜佐方 | 吉田藩 | 宇和島市吉田町 | 7 |

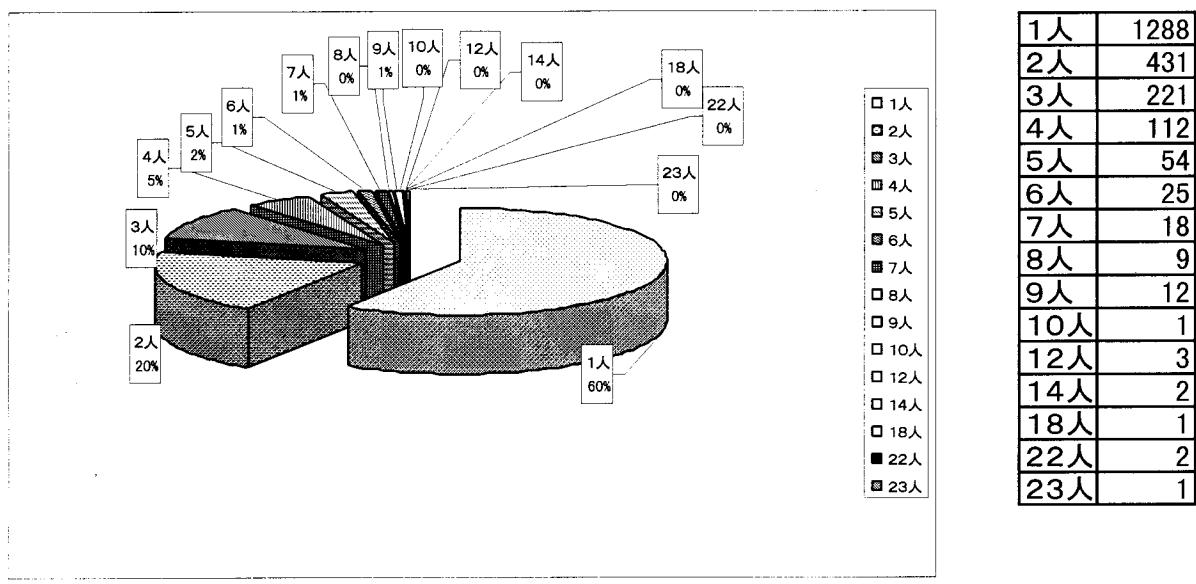
(人)



グラフ2－1 「於仏寺接待」にみる地域別遍路数



グラフ2－2 過去帳にみる地域別遍路数



グラフ3 遍路の1グループの人数